

フットボールのつんちく その①

今やっているフラッグフットボールは、アメリカンフットボールをかんたんにしたものですが、「フットボール」をえいごのじてんでしらべると、三つの意味があります。それは、①アメリカン・フットボール ②アソシエーションフットボール(サッカー) ③ラグビーの三つです。この三つのスポーツは、今では、それぞれちがったスポーツとして、世界かく地で行われていますが、もともとは、「フットボール」という一つのお祭りさわぎだったのです。たったこのボールを大人がうばいあったのです。毎日の苦しい生活からのがれ、気ばらしのためにこのフットボールを行ったのです。今でも、イギリスのいなかでは、このフットボールを行っているところがあります。

フットボールは、十四世紀ごろに、イギリスではじまりました。農民(のうみん)や職人(しよくにん)などが、数十人から多いときには、五百人にもものぼる人々が、入りみだれて一つのボールをうばいあったのです。二チームに分かれて、村のはずれにある場所(多くはこなひき小屋)にボールを運べばよかったのです。

フットボールが行われた場所は、道路、草地、

広場でした。当時は今のように運動場などないので、町や村全体が一つの競技場(きょうぎ場)となったのです。

このお祭りさわぎは、道路などで行われていたため、「ストリート・フットボール」また、人々のフットボールと言う意味で「マス・フットボール」とよばれていました。

この「マス・フットボール」は、持って走ったり、投げたり、また、ボールをけつてもいいことなどが決められていました。また、ボールをうばうとき、ぶきを使ってはいけないことなども決められていました。



フットボールのつんちく その②

フットボールはすさまじいおまつりさわぎ

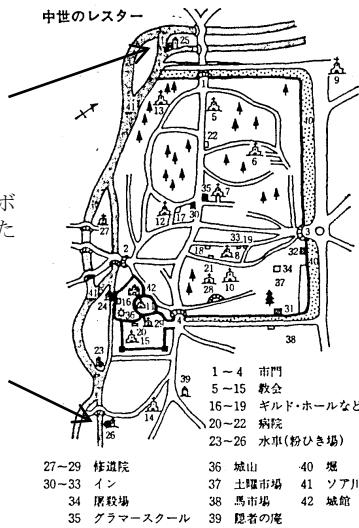
フットボールは一つのボールをうばいあう「お祭りさわぎ」ですが、いつも行われていたのではありません。キリスト教の復活祭(イースター)より四十一日前の火曜日にあたる日に、行われていたのです。日本のかく地のお祭りが神社の行事と関係するように、イギリスなどヨーロッパの国々では、キリスト教の行事として行われてきました。当時は、もちろん鉄道も車もありません。イギリスの各地方がそれぞれのやり方で、フットボールを行っていたのです。その様子をあらわす十六世紀のきろくに次のようなものがあります。

：ルールは、すこしきみょうなものだ。第一、各チームの人数にはせいげんがない。町の中央に住む人は一方のチームに入り、橋の南に住む人はもう一方のチームに入る。ゴールは、おたがいに三マイル(約五キロメートル)はなれた二つのこなひき小屋で、町の中央から、それぞれ一・五マイルはなれている。

はじまる時間近くになると、何人もの男たちが、橋近くの草原にあらわれてきた。二百人をこす男たちが草原の中央に集合する。古い教会の時計が、二時をつげると、ボールは空中に投げられ、ボールのうばい合いがはじまる。ボールが地面に落ちると、男たちはそれを目かけて

どっしんしてくる。相手を思うぞんぶんけつたり、なぐったりしている。ボールが、町の門をくぐりぬけ、通りの一つにとびこむ。ついに川の中に落ちて、ボールが川の流れに流されると、人々も川の中にいどし、今度は水中戦となる。一方の者は、相手をようしやなく水の中につき落とす。

この記ろくから、フットボールがいかにはげしいものだったかがわかります。フットボールが行われると、大それたことになるため、町中にある家は、戸やまどに板を打って、こわされないようにしていたようです。



こなひき小屋

町の南北にある粉ひき小屋にボールを運ぶというとてもかんたんなルールでした。

こなひき小屋

フットボールのうんちく その③

ラグビーボールはなぜ楕円形なのか？

今の多くのボールは、内がわがゴムになって、その外に皮をぬいあわせてできています。空気を入れてはむむようなくくりになっています。サッカーボールは丸くて、ラグビーボールは楕円形をしています。元々は同じフットボールというスポーツだったのに、ラグビーボールだけがどうして楕円形をしているのでしょうか？

その答えは十六世紀に書かれた次の詩に示されています。

：大人たちがこえた豚を殺すのに
いそがしく働いている時
子どもたちは家族とともにする
おいしい「こちそう」を夢見て、
喜びに胸をふくらませる。
殺した豚から膀胱（ぼうこう）をとりだすと、
その皮がうすくなるほどふくらませ、
中にそら豆やえんどう豆をたくさん詰め、
それを空高く投げあげる。
それは、からから、かたかたと音を立て、
すきとおるように光る。
足や手でその膀胱を打ち合い、けり合う時
心はみたされ、よろこびは高まる。

今のような空気入りのゴムのボールが開発されるのが十九世紀になってからなので、それがなかったころは、牛や豚の膀胱（ぼうこう）



16世紀の木版画には膀胱をふくらます子どもの姿がえがかれています。



をふくらませて、その中に豆をつめていたようです。牛の膀胱は今のラグビーボールよりも少し大きめで、楕円形をしています。豚の膀胱は、20〜25cmほどで、こちらの方は、球形に近いです。はむむものではなく、「ドサツ」というにぶい音がしたそうです。後に、膀胱を中ふくらとし、その外側に皮をぬい合わせ、空気を入れてボールにすることが考えられました。膀胱の形に合わせて皮をはったので、ラグビーボールは楕円形のボールとなったのです。

フットボールのついでへ その④

「エリス伝説」サッカーとラグビーの分かれ目

みんなは、「ラグビー」というスポーツを知っていますか。一言でいうと、「だ円形のボールをうばい合うじん取りゲーム」です。ボールを持ったらひたすら走ります。ボールは味方にパスしてもいいけど、前には投げられません。走って相手チームのゴールにたどりついたら「トライ」と言って得点になります。

今回のお話は、この「ラグビー」がどうして、生まれたかについてです。「ラグビー」と言う名前には、イギリスのパブリックスクールという学校(当時は高い身分のき族の子どもが通う学校でした。今でもイギリスにはあります。)の名前でした。そこで行われていたゲームのやり方が、今のラグビーのルールの元になったから、「ラグビー」って言います。それでは、ラグビー校でどうして、ラグビーが生まれたのでしょうか？

サッカーとかラグビーとかが生まれる前は、もともとは、フットボールというゲーム(お祭りさげぎ)だったことを前に話しました。一八〇〇年ころのフットボールのやり方というと、多くの学校では、今のサッカーのように、ボールをけることが中心で、ボールを持って走ることはきんしされていたのです。

一八二三年のこと。ラグビー校でもフットボールの試合が行われました。そのし合中、次のような事件(じけん)がありました。

「ボールを持ったエリスという少年が、何を考えたのか、ボールにさわったとたん、うででしっかりとホ

ールをかかえこんだまま、ゴールにとびこんだのでした。これを見ていた人も、やっていせんしゅも、びっくりしたにちがいありません。今のサッカーのしあい中に、ボールを拾って、そのまま、相手のゴールにとびこむようなものですか……。」

これが「エリス伝説」と言われ、ラグビー校には今でも、この事件を記した記念碑(きねんひ)がのこっています。そこには、次のように書かれてあります。「この碑は、一八二三年、当時のフットボール・ルールをみごとに無視(むし)し、初めてボールをうでにかかえて走り出しラグビーの形を作り出したウィリアム・ロウエツプ・エリスの功(こう)を記念(きねん)とする。」

「エリス伝説」は伝説なので、本当にあつたのかどうかはわかっていません。でも、ラグビー校でラグビーが生まれたのはたしかなことなので、こんなことがあつてもふしぎではないでしょう。ラグビー校の人たちはこれをすぐに禁止(きんし)せず、「こんなやり方でやったら、きつとおもしろいぞ。やってみようか。」と

考え、そしてラグビーが生まれたのです。ルールをやぶることから新しいスポーツが生まれるなんて、おもしろいことだと思いませんか？



フットボールのついでへ その⑤

ー続・サッカーとラグビーの分かれ目ー

一八六三年に、十三条のフットボール・アソシエーション(F.A.)のルールができました。それまでに、フットボールのルールをめぐって、数回の会話がもたれました。その会話では、二つの意見が対立(たいりつ)します。

多くの人たちがきんせいするルールと言うのは、ボールを手で持ってあつかつたり、手で持って走ることを禁止(きんし)しました。ボールはおもに足でつけてはこばなくてはならない(ドリブル)とし、相手の足をけつたり、すくつたりすることも同時に禁止したのです。

一方、少ない人たちの意見は、ボールを持つて走つたり、相手をたおすこと(タックル)など、相手と体をふれあうことこそ、フットボールの一番おもしろい所だとして、意見をゆるらなかつたのでした。

数回の会話でも決まらず、けつきよく、多数決(たすうけつ)で決めることになりました。そして十三対四で多数派の意見がみとめられたのでした。そして、フットボール・アソシエーション(F.A.)のルールが生まれ、フットボール協会が生まれることになりました。

ところが、少数派はこの決定をみとめず、フットボール協会をはなれることになりました。協会を出て行った人たちは、一八七一年に自分たちでべつの協会をつくり、ちがつたルールによるフットボールを作ります。そのルールはラグビー校で行われていたものを主に使つた

め、ラグビー・フットボール（ラグビー）とよばれるようになりました。

ラグビー派

相手をたおすことこそ、フットボールのみかだ。みっしゅうでのボールのうばい合いがおもしろい。



サッカー派

足を使うからこそフットボールと言う。パスを回してシュートするのがフットボールのみかだ。



対立



1875年のサッカーゲーム

こうして、イギリスのフットボールは、二つのタイプで行われるようになりました。当時のイギリスは、多くの植民地（しよくみんち）を世界各地に持ち、ヨーロッパはもちろん、中南米の国々、アジアへも伝わりました。アソシエーションフットボール（FA）は、アジアやアメリカでも行われて、一部の国では、「サッカー」とよばれるようになりました。

一方、アメリカに伝わった、ラグビーからは一八八〇年に「アメリカンフットボール」が生まれ、アメリカを代表するスポーツとして発展します。今やっているフラフトは、アメリカンフットボールをかんたんにしたものです。

フットボールのうんちく その⑥

ラグビーボールのお話

ラグビー校で行われていたフットボールが元となつて、今のラグビーになったという話を前にお話ししました。このラグビー校の前にギルバートというくつ屋さんがあり、生徒たちはこの店でくつをつくらり、しゅう理したりしていましたが、ボールも一しよに作つてもらっていました。このギルバートさんが牛やブタの膀胱（ほうこう）の形に合わせて楕円形（だえんけい）の革袋（かわぶくろ）をつくらせてしまったのが、初めに丸く作った革袋が、使っているうちに楕円形になつてしまったのが、今となつてはくわしいことはわかりませんが、いつの間にか、生たちが楕円形のボールの方がおもしろいということから、この学校のフットボールは楕円球のボール使うようになったと言われています。それが丸いボールでプレイするほかの学校のフットボールとちがうところからラグビー（校）のフットボールとよばれるようになったのです。ラグビーボールが楕円形なのは、このようないきさつがあります。（今でもラグビーの試合で使われているボールの横には、GILBERTと書かれています。靴屋さんが後にギルバート社というボールを作る会社にはつてんします。）

一七九一年、フランスのジブラック伯爵（はくしやく）が自転車を発明し、十九世紀のなかばをすぎるとこれが生活の中でも使われはじめます。一八八八年アイランドの獣医（じゅうい）のー・B・ダンロップは、むす子のジ

ヨニーにたのまれてもつと乗り心地のよい自転車をつくらうとして、「空気入りタイヤ」を考えます。それから、自転車は急に発つたつて、世界中のひとに利用されることになりました。この空気入りタイヤをボールでも使うようになり、ゴムに空気を入れてふくらますようになったのです。

